

「エン・クリスト」第1号 生命の泉

1980年6月8日（京大会館）

今日はヨハネ福音書の4章からお話をさせていただきます。イエスは暑い真昼どき、ガラリヤへの旅路にてサマリヤのスカルという町に來られました。そこにヤコブの井戸がありました。

「イエスは旅に疲れ、井戸のかたわらに腰をおろされた。時は十二時頃であつた。一人のサマリヤの女が水を汲みに來たので、イエスは『水を飲ませて下さい』と言われた。弟子たちは、食べ物を買いに町に行つていた。するとサマリヤの女は、『ユダヤ人のあなたが、わたしのようなサマリヤの女に、どうして水をくれとおっしゃるのですか』と言つた。ユダヤ人はサマリヤ人と交際していないからである。」（ヨハネ4・6～9）

サマリヤ人は、紀元前8世紀にイスラエルの首都サマリヤ陥落の時居残つた者と、アッシリヤ王が植民として送りこんだ異教徒との混血児の子孫で、ユダヤ人とは仲が悪かつたのです。だから、ふつうユダヤ人からサマリヤ人に言葉をかけたりしない習慣だつたようです。ところが、イエスはそんなことは一向におかまいなく、このサマリヤの女に声をかけられた。それで女は驚いたのです。

それに、この女は身持ちも悪いらしく

「五人の夫を持ったが、今のは夫ではない」（ヨハネ4・18）

とイエスに見抜かれたような始末で、だいたい、真昼どきに、水を汲みに來るといふのはあまりほめた話ではありません（朝早く水を汲みに來るのがふつうです）。なのに、イエスは親しげに言葉をかけられた。イエスは人を分け隔てなさいません。それどころか、けげんに思っている女に向かつて、こんなことを言われたのです。

「もしあなたが神の賜物^{たまもの}を知り、また『水を飲ませて下さい』と言つた人が誰であるかを知っているなら、あなたの方から願ひ出たことであらう。そして、その人は、あなたに生ける水を与えたであらう」

と。女は全く知らずして救ひ主キリストに出会つてゐるのです。これこそ全く予期せざる「出会い」であり、しかも神様の方から手をさしのべてこられたのです。今、目の前にいらつしやるその方がどんな方か、

「それをほんとうに知りさえしたら、あなたはきつと心から願ひ求めることになるんだよ、神からのすばらしい賜物を！」



とこの方はおっしゃった。願い求めさえすれば、無条件に「生ける水」を与えたのだよ、と呼びかけられました。神様の世界は何と簡単・単純なのでしょう。身分も資格も何も要らない。ただ心から願い求めれば賜^{たまわ}るのだと。

女はしかし、イエスのおっしゃることがよくわからなくて、この人はどこから不思議な方法でその「生ける水」とかいふ不思議な水を汲んでくるのだろうかといふかった。この女に対してイエスは次のような大変な答をなさったのです。

「この〔井戸の〕水を飲む人は皆、また渴く。しかし、わたしが与える水を飲む人は、永遠に渴くことがない。わたしが与える水は、その人の中で湧き出て、

永遠の生命に至る水の泉となるであらう。」

そうです。イエスは次元の違うものを与えようとしてこられたのです。このヤコブの井戸の水は貴重です。炎暑の中で水は無くてはならない。いや、日常生活において水がなかったら生きていけない。水の乏しいイスラエルでは、井戸はとくに大切でした。この井戸はまた、文化・文明を指しているようです。見ゆる世界、この地上界のさまざまな良き物、必要な物——それは人間の生存にとって必要不可欠であります。けれども、それは永遠のものではありません。それだけで人間はほんとうに生き得るものではありません。心の奥底に渴きがあります。満たされない何かがあります。仕事に、育児に、または何かに熱中することによって人はその渴きを忘れ、あるいはどこかに追いやってはいましても、ふと我に帰ったとき、ある深淵、ある暗闇、あるいは、ある空しさを覚えないでしょうか。この渴きを癒し給うのは、実は、そのための特別の水を持つておられるキリスト・イエスだけなのです。この方がこの渴きをいやす霊水をお持ちなのです。キリストはこれを無条件に差し出しておられるのです。この霊水は永遠の生命を与えます。

「わたしが与える水は、その人の中で湧き出て、永遠の生命に至る水の泉となる」

とは、何と素晴らしいことでしょうか。

井戸の水はいつかは枯れて無くなるときがきましょう。その水を飲む人の生命にも終りの時がまいります。しかし神の給う霊的^{たまわ}生命は永遠のものであります。キリストから霊水をいただいて飲む魂は永遠の生命を賜っています。そして地上での生活にうるおいが、みずみずしさが漲^{みなぎ}ってまいります。この霊水は人に活力を与え、創造的な活動へと促^{うなが}すエネルギーの源です。働くことに喜びをとまなわせます。働くことが即、祈りとなり、神との交わりへと導きます。この霊水は、清冽^{せいらつ}な地下水のように、人の営みという樹木を活かしめるのです。そして、この霊水を吸い上げる根っ子は、実は「折り」なのです。祈りを通してどこに霊水を探りあてるのですか？ どこに清水が湧いているのですか？ それは十字架の場でした。

「十字架の蔭に泉湧きて、



いかなる罪もきよめつくす。

おらせ給え、この身を主よ、

十字架の蔭にとこしえまで。」（聖歌396）

十字架という泉から湧き出ている真清水（霊水）は、実は聖霊でありました。

「わたしが与える水」

とは聖霊のことでした。いつも小池先生が語って下さるように、あるがままの自分を十字架のキリストの中に投げ入れる。折りの中でキリストの中へ自分自身を投げ入れる。キリストの中へ折り入り、帰り入る。そしたら、聖霊の光に包まれる。キリストは抱き給う。悲しみの中にある人、人生の谷間にある人よ、どうかキリストに出会って下さい。そして、生命の水をいただいて、今度は、あなた自身がひとに水を分ち与える泉となって下さい。



「エン・クリスト」第3号

信入行転・愛抱捨身・望生放光

——1980年秋期京都福音特別集会記事——

1980年11月23日～24日

1980年秋期京都福音特別集会は、11月23日（土）～24日（日）、一泊二日をもって、例年のごとく鴨川畔の大和屋旅館を会場として開催された。参加者は高校生以上だけでも80名を越える盛況ぶりで、鹿児島、高松、岡山、松本など地方の諸兄弟、東京・埼玉・裾野・大阪・奈良の各召団の諸兄弟姉が参加され3回にわたる小池辰雄先生の御講筵を中心として、内容豊かな、恵み溢るる特別集会となった。第1回（22日午後4時～6時）は奥田の司会により先生の御講筵は「パウロの信」、第2回（22日晩7時30分～9時30分）は大阪・梅村兄の司会により「ヨハネの愛」、第3回（23日午前9時30分～11時30分）は再び奥田の司会で「ペテロの望」の御講筵。実にパウロ、ヨハネ、ペテロの三使徒を通して、キリストの信・愛・望の事態が一つの交響楽のごとく奏でられた。紙数の関係からここでは第1回集会を中心としつつ、今回の特別集会の内容を記したい。

「パウロの信」パウロのガラテヤ書3章1～14節を基軸として、まことの「信」の事態——それは聖霊が中心であり、聖霊の事態である——がいかなるものかを自在に力強く展開された。

「汝らが御霊を受けしは律法の行為によるか、聴きて信じたるに由るか」

「御霊によりて始まりしに、今肉によりて全うせらるるか」

「然らば汝らに御霊を賜いて汝らの中に能力ある業を行い給えるは、律法の行為に由るか、聴きて信するに由るか」

これらのみ言葉の内実がどんなに深い豊かなものであるかを小池先生は、御自身の信仰生活50年の中から語り出された。私はまことに目を見張る思いで、全く新しく聴く思いで聴き入った。聴き入ることは直ちにキリストの中に信じ入ること、祈り入ることである。語っているのはもはや先生ではなく、みたまのキリストである。私は語りつつあられる先生が天上人であって、身は完全に天界にある方が、しばし身体を宿として地界に降り来り、天界の消息を告白、展開しておられると、そのように思えてならなかった。だからこそ、先生が、十字架、みたまの事態に念いを致し、それを語り出さんとされるや否や、激しく、おさえ難く異言、霊言が先生の口について噴出してしまふのだ。いかに先生が十字架と一如であり、みたまに貫かれておられるか、「無」の事態を体得しておられるかに驚嘆する。しかも先生は、「無」は自分で獲得するものではなく、——自分で「無」になろうとして「無」となるのではなく（それはできないこと！）——賜りたる「無」、十字架が絶対恩寵として与えて下さった



ている「無」であることを明言しておられる。だから質的には、誰でもが先生と同じ事態にあずかりうるわけだ。一体どこが我々と先生と違うのか。それは「祈りの深さ」だと思う。先生がいつもおっしゃるのように、みたまの秘訣は「祈り」にある。祈りとは、お願いではなく、全存在をぶちまけて、みたまのキリストの中へ自分を投げ入れること。「主よ！」との全存在の叫びをもって、主キリストの中へ投げ身すること——水泳の飛び込みのようにキリストという大海のふところへ投身していただける——、このキリストは十字架のキリストである。

「十字架につけられ給いしまなるイエス・キリスト」(ガラテヤ3・1)

である。先生の第1回の御講筵から、抜粋してみよう。

十字架につけられたキリストは、十字架からおろされた。しかし世界の終りにいたるまでキリストの十字架は我らに臨み、迫っている。魂は本当の現実にあづかるまではどうにもならない。ほんものにぶつかり、本当の現実に入ると、もうあとはどうでもいい。……

キリストはいきなり天界に行けた人だ。しかも、キリストには受くべきバプテスマがあった。キリストには洗礼者ヨハネからの水のバプテスマと、そのとき同時に天界からのぞんだ聖霊のバプテスマのほかに、十字架のバプテスマ、血のバプテスマがあった。これは死へのバプテスマであった。

聖霊は生命^{いのち}へのバプテスマ！ 十字架は死へのバプテスマであった。何のためのこのバプテスマか！ 聖意を体现し、聖意を一切として貫いた義人なるキリストが、罪人なる我^{つみびと}らの受くべき「神の審き」を全部引き受けて下さったのだ。

「義」とは聖意体现の事態をいう。神を然りとし、自己を否とする。聖意を百パーセントたて、我意は百パーセント棄てられている事態、聖意がこの身において貫かれている事態。これが義だ。それができたのはキリストだけ。我々は手放しではできない。それが「罪」である。「信」とは全存在で受けとること、自分の側をすっかり投げ棄てる。キリストの言、行為をそのまま受けとることが信。なぜならキリストこそは神の言であり、神の現象体であり、道であるから。このキリスト、その言、行を百パーセント受けとる。これが信することだ。だから大変なことだ。こんな「信」は我々には無い。我々は信することすらできないのだ。「信仰によって義とされる」といい、人は簡単に「信する」というけれども——信じているような顔をしているけれども——、我々には「信する」ということは本当にはできない！ イエスだけが信することができた。そのイエスは自分を何者ともしていなかった。それが「霊の貧しさ」だ。霊が貧しいからあんなに豊かだった。イエスこそが本当の「信」だった。「信」の化体だった。その「信」をお前にやるよ、というのが十字架の恩寵だ。

キリストは本当に神を受けとって、神を体现していた。これが義だ。だから信（神を百パーセント受けとること）と義（神の聖意が百パーセント貫徹されること）とは一つだ。「信」が成就している事態の実質（内容）は「義」だ。信義一如だ。



キリストは神の中に信入した。そしたら行為（聖意体现の）に転じた。信入行転一如の世界である。なぜ行転できるか。神の力が来るから。力とは何か。聖霊である。み霊ほどの力はどこにもない。展開してやまない。

だから、キリストは「全存在で聴いて本当に身体^{からだ}で受けとった」（身体とは全存在ということ）。そしたらみ霊がやってきた。ガラテヤ書の

「聴きて信じたるに由る」

とはそういう消息だ。我々にはそれが手放しではできない。そこに十字架がある。

「自分が引き受けた、心配するな」

これが十字架である。この十字架にぶつ倒されることだ。全存在で降参することだ。十字架に降参しない人はみ霊の現実に入れない。

「神の審き」を全部キリストが引き受けた。悟りの世界とは違う。恩寵なのである。

「我キリストと共に十字架せられたり。もはや我生くるにあらず。キリスト我

がうちに生き給う」（ガラテヤ2・20）

とは、キリストのみ霊が、みたまのキリストが、わがうちに生き給うということだ。「罪」の無くされたところにみたまが与えられる。イエスは十字架の血のバプテスマをお受けになるまでは火（みたま）を投ずることができない。だから十字架の贖い（贖罪）を終え復活した後、昇天なさる前に、「祈り待て」と弟子たちに命じられた。

十字架の土台の上に聖霊が来るのであって、十字架抜きには絶対に聖霊は来ない。十字架抜きの霊は聖霊ではない。贖いを本当に受けとるところに聖霊が来る。その道は祈りである。十字架によって開かれた門の中に祈り入る。信入、帰入、祈入する。そしたら聖霊が来る。キリストに圧倒されて進んで下さい！

ヘリゲルの「弓と禅」先生は自在に語られ、オイゲン・ヘリゲルの『弓と禅』の話を引かれた。ヘリゲルはドイツのすぐれた哲学者であるが、大正13年から昭和4年までの5年間、東北帝大において教壇に立つたかわら、阿波研造師範に師事して弓道の奥義を極められた。『弓と禅』はその血のにじむような修業の記録である。正しい「射」、正しい「放れ」ができてなくて模索しているヘリゲルに対して師範は言った。

「あなたがなぜ放れを待つことができないのか、又なぜ射放される前に息切れになるのか、御存じですか。正しい瞬間に起こらないのは、あなたがあなた自身から離れていないからです」

「正しい弓の道には目的も、意図ありませんぞ！……あなたがあまりにも意志的な意志を持つていることがあなたの邪魔になっているのです。あなたは、意志の行わないものは何も起こらないと考えていられるのですね」

これに対してヘリゲルは、

「弓射は決して暇つぶしや目的のない遊戯ではなく、生死を賭けた一大事である」



と先生はしばしば仰っしゃったではないか、と抗議する。師範は、

「それはどこまでも主張します。吾々弓の師範は申します一射一生と。……射手は弓の上端で天を突き刺し、下端には絹糸で縛った大地を吊るしていると。若し強い衝撃で射放すなら、この糸がちぎれる惧れおそがあります。意図をもつもの、無理をするものには、その時天地の間隙が決定的となり、その人は天と地の間の救われない中間に取り残されるのです」

「無心」の境地を求めて稽古に励みつつも一向に進歩しないで焦るヘリゲルは、師範に、既に稽古が4年目に入っており、それに日本滞在の期間も限られている事を訴える。師範は答えた、

「目標への道は測量するわけにはいきません。何週、何か月、何ヶ年といつても、それに何の意味がありません」

と。

「併し私が途中でやめねばならないのでは？」

とヘリゲルは尋ねた。

「貴方が本当に無我になり切ったならば、いつでもやめてよいのです。だからそこを稽古しなさい」

「射と放れ」の段階から進んで、ヘリゲルはやがて「ま的に向かって」射る稽古へと進み、またまた絶望する。師範はある晩、彼を呼んだ。その時のことをこう記している。

「道場には明々と燈がついていた。師範は私に命じて縫針のように細長い蚊取線香を的の前の砂地にさし込ませたが、あずち（弓のまとを立てかけておく盛り土）の燈にはスイッチを入れないようにと注意した。真暗だったので私はあずちの輪郭すら見分けがつかなかった。そして若しも蚊取線香のちっぽけな火玉がそのありかを示さなかったとしたら、私は的の立っている場所を、はつきり見定める事は出来なかったであろう。師範は礼法を「舞った。彼の甲矢はや（第一の矢のこと）はこう々たる明るみから真暗い闇の中へと飛んでいった。炸裂音で私はその矢が的あたに中つた事を知った乙矢おとや（第二の矢）も亦中つた。あずちの燈をつけたとき私は、甲矢が黒点の中央に当たり、又乙矢は甲矢の筈はずを砕いてその軸を少しばかり裂き割って、甲矢と並んで黒点に突き刺さっているのを見出した。私はぼうぜん呆然とした。そしてその矢を別々に引き抜くに忍びず、的と一緒に持ち帰った。師範はそれをしげしげとみつめていた。やがて彼は言った。『甲矢の方は別に大した離れ技でなかったと貴方は御考へになるでしょう。何しろ私はこのあずちとは数十年来なじんでいるので、真暗闇の時ですらのが何処に在るか知っているのにちがいないというわけだね。そうかも知れません。又私は言い訳をしようとも思いません。併し甲矢に中つた乙矢——之をどう考えられますか。とにかく私は、この射の功は「私」に



帰せらるべきものでない事を知っています。『それが射たのです。そして中てたのです。仏陀の前でのように、この的に向かつて頭を下げようではありませんか』と。この二本の矢をもって、師範は明らかに私をも射とめたのであった。一晚の中にまるきり別人になったかのように、私はもはや私の矢や、それがどうなつたかについて心を煩わす誘惑に陥らなくなった。」

ヘリゲルは稽古を重ねて上達した。しかし、彼がほんの一寸でも正射を誇る顔付をすると、

「一体何を考えているのですか」

と師範は注意した。

「悪い射に腹を立ててはならないという事は、貴方はもうとつくに御存じの筈です。善い射に悦ばない事を附け足しなさい。快と不快との間を右往左往する事から貴方は離脱せねばなりません。貴方はむきにならない平静な気持で、そんな事に超然としているように心がけねばなりません。即ち貴方でなくて恰かも別の人が善い射を出したかのように悦ぶ事を心がけるのです。この点でも貴方はうまず撓^{たわ}ま^ず練磨せねばなりません——この事はどんなに大切であるか測り知れないのです。」

遂に最後の段階に到達する時がきた。ある時、彼が特別善い射を出した後師範は尋ねた。

「今や貴方は『それ』が射る、『それ』であてるといふ事が、何を意味するかお分りでしょうか」

と。彼は答えた、

「私はもはや全く何も理解しないように思います。それは余りにも単純な事です。かえつて私を惑わせます。一たい弓を引くのは私でしょうか、それとも私を一杯に引き絞るのが弓でしょうか。的に中てるのは私でしょうか、それとも的が私に中たるのでしょうか。あの『それ』は肉眼には精神的であり、心眼には肉体的なのでしょうか——その両者でしょうか、それともどちらでもないのでしょうか。これらの凡て、すなわち弓と矢と的と私とが互に内面的に絡みあっているのです。もはや私は之を分離することは出来ません。のみならず之を分離しようとする要求すら消え去つて了いました。というのは私が弓を手にとって射るや否や、一切があまりに明瞭で一義的であり、滑稽な程単純になるのですから……」

と。「今やまさしく」師範はその時彼を遮^{さへぎ}つて言った、

「弓の弦が貴方の肺腑を貫き通りました」

と(『弓と禅』稲富・上田訳「福村出版」1986年)。

全集会の標語は

「**充ち溢るる神性は悉く形体を成してキリストに宿る**」(コロサイ2・9)
であつたが、



「我々のキリスト信受の内容は神性が溢れること。我々の生れながらの資質、才能に神性が加わってくる、溶けこんでくる。神性は豊かである。限界を知らない質をもつ。これが楽しい。それは人をさいわいにする。信という内容が行転するといったが、神の栄光が顕われるのである」と語られた。

愛抱捨身 第2回「ヨハネの愛」では、ヨハネ伝14章から。――十字架の門から祈り入れば、そこは聖霊の世界、聖霊の愛の世界。愛は一切に勝つ。十字架の棄身の愛だから。キリストの愛、みたまの愛で包まれ、この聖霊に触れたら棄身の力、棄身の愛が湧き出づる。これが十字架を負わしめる。聖霊でないと負えない。敵をも救い上げる愛である。だから、みたまの愛に抱かれ身を捨てて、愛抱捨身！

望生放光 第3回「ペテロの望」では、希望の使徒ペテロの前後書から。――

「万物の終り近づけり」（ペテロ前書4・7）

「我らの望みは新天地の希望であり、御国を来らせ給えの祈りは、みたまにあつて御国の双葉が現に我らの中に来てから祈れるのだ。福音は御利益ではない。汝の聖旨の成ることを祈る。

「苦難にあずかればあずかるほど喜べ」（ペテロ前書4・13）

苦難なくしては本当の事は成らない。一日を千年として生きよ、一つの事に打ち込め」

と囲碁の戸谷松之助の伝を語られた。

「彼が夢で囲碁の極意を教えられたように、我々も深く祈って眠ると夢で答えをいただくことがある。新天地の夢をみているのがヨハネ黙示録だ。みたまの賜う望みに生きる人は聖霊の光を放つ。望生放光！何をしようと地上では主の福音の証し人、それが光を放つ。信入行転・愛抱捨身・望生放光、この三つの熟語に福音の一切が含まれている。その全体を貫いているものは、みたまにおける祈り。この祈りなくして何事も生じない。」

午後の感話会は、岡山の斎藤桂子さん（本誌第2号参照）の、生ける生命の泉をからだの中（みぞおちのあたり）に与えられたという、そして、作品が湧き出で溢れてやまないというお話など、兄妹たちの感銘深い感話、証言に時のたつのを忘れる思いであった。

京都特別集会のあと、小池先生は早速に次のような作詩をお届け下さった。召団讃美歌A20「旧27番」「信じ入れば」（1980年11月27日午前10時作）、讃美歌514「よわきものよ」の調べ）。

1 信じ入れば みを得

行に転じ 人を助く

「おりかえし」

主に在りて 力あり



3

主の光を
新天地の

2

主に愛され
捨身すてみの愛

主のみ霊こそ

原始力ぞ！

抱いだかれなば

われにみつる

望みに生く

四方よもに放つ



「エン・クリスト」15号

キリストの愛（講演要旨）

1983年6月4日（京都会館）

この講演会は、単なる講演会ではなく、キリストの臨在し給う天国がここに現れるような、そういうひとときでありたい。さて、我々人間の根源的な欲求として、私は、義への欲求と愛への欲求をあげたい。義（正しき）への欲求を全くもたない者は、人としてめざめていないといわざるをえない。どんな幼な子でも、義がふみにじられるとき、憤りをおぼえるのではないか。もう一つは愛。義しきだけでは人間は生きられない。心をみだし、うるおすものが欲しい。愛が欲しい。その中の最大なるものは異性への愛である。そして愛が失われるとき、人の心は悲しみ、傷つく。

旧約聖書では、神から人に対する義の求めが強い。十戒は神の義と愛の要求である。そしてその根底には神の人に対する信愛が脈打っている。神の言はどんなに烈しい言でも、みな背後に愛が隠されている。愛の言葉である。これを受けそこない、神にそむき、つまりずいていたのがイスラエルの歴史であった。この背信のイスラエルの民の罪を背負っていたのが預言者たちであり、究極的にはナザレのイエスであった。イエスは神を一切として生きた。そこに臨んだ神の力と愛は病者への癒し、罪のゆるし、霊縛された者の解放として顕現した。

「主エホバの霊われに臨めり。こはエホバわれに膏をそそぎて貧しき者に福音をのべ伝うることをゆだね、我をつかわして心の傷める者をいやし、

四 人にゆるしを告げ、縛められたる者に解放を告げ、……すべて哀む者を慰め、悲哀にかえて歓喜のあぶらを与え、憂いの心にかえて讚美の衣を与えしめ給うなり」（イザヤ61・1～3）

このイエスが十字架の上で無惨な死を遂げられた。十字架は、神の生命に、神の義に、そして神の愛に生き抜いた一人の人の惨めな敗北の姿である。人の目にはそのように映る。しかし、このイエスをその後の人々はどれほどまでに慕っていることか！ このイエスを信じてどれほど多くの人たちが生き生きと力強く生きていることか！ ほかならぬこの私も、人生の途上において、このイエスに出会って大転換を遂げたのである。イエスは復活の主キリストとして顕現し、今に至るまで、みたまのキリストは働きつづけ、祈りつづけておられる。本願の愛の祈りをもって。全存在をもってキリストに祈り入れれば、直ちにわが衷にと入り来り給うみたまのキリストである。イエスの実存の中心は愛であった。与えてやまぬ愛であった。その極みは、我々罪びとのために、その生命を棄て給うた十字架の



愛であつた。

「まことに彼は我らの病患を負い、われらの悲痛をことごとく荷った。それなのに我らは彼をこう見做した。彼は神に責められ、打たれ、苦しめられたのだと。ところが、彼こそは我らの罪の為に刺し貫かれ、我らの不義のために砕かれたのである。……エホバは我らすべての者の不義を彼の上に置かれた。……彼は多くの者の罪を荷い、罪過の者たちの執り成しをした」（イザヤ

53・4～12）

十字架の愛がどんなに深い愛であるかは、私たちが生涯かけて体で受けとるべきものである。言葉で語れるものではない。けれども、この愛をほんとうに受けとった人は、キリストと同質の愛の人に化される。キリストと同質の愛に生きた人として、私はコルベ神父のことを思わずにいられない。第二次大戦下、ポーランドのアウシュビッツの収容所に捕囚の身となった神父が、一人の囚人のために身代わりとなって餓死刑に服し、己が生命をその名もなき囚人に与えたのである。収容所の中で神父は常々語っていたという。

「愛のあるところが天国であり、地獄とは愛の失せたるところだ」

と。厳しい収容所の現実、およそ愛とは縁遠いような境遇の場所だった。神父はいう。

「もし、ここに愛がないならば、愛を創り出そうではないか」

と。事実、神父の中に脈打ち生命していた愛は、どんな嵐もこれを消すことのできぬ愛の炎であつた。そして遂に彼は、一人の囚人のために生命を棄てたのであつた。このコルベ神父の中に生命していたのは、実にキリストの愛の生命であつた。みたまの愛であつた。本質的には、キリスト者はみな、かくのごとくであるはずだ。自己愛、我執、エゴイズムから抜け切れぬ我ら一人びとりを、キリストは十字架でもって贖いとして下さっている。旧きアダムたる我を十字架で殺し、新しい生命、みたまの生命に限りなく生かしめて下さっている。これは絶対恩寵の霊的根源現実である。ひれ伏して、祈りの中で全存在をもつて体受すべき恩恵の事態である。さればこそ、

「我活く。されど我に非ず、みたまのキリスト、わが中に生き給うなり」（ガ

ラテヤ2・20）

と告白しうるのである。ロマ書8章は、キリストに捉えられ、みたまの愛にあつて生き抜く使徒パウロの白眉の文であり大告白である。コリント前書13章とともに我らの骨髓にまで刻み込もう。



「エン・クリスト」22号

わが力は神に在り

——集会における講筵をもとにして——

1985年1月20日

「汝知らざるか、聞かざるか、エホバは永遠とこしえの神、地のはての創造者にして、倦うみ給うことなく、また疲れ給うことなく、その聡明さとこと測りがたし。疲れたる者には力を与え、勢力なき者には強きを増し加え給う。年少わかき者も疲れ、倦み、壮さかなる者も衰え衰う。然はあれど、エホバを待ち望む者は新たな力を得ん。また鷺さかの如く翼をはりて昇らん。走れども疲れず、歩めども倦まざるべし」（イザヤ40・28～31）

今日はこのイザヤ書の聖句から導かれよう。いつか札幌のM兄がこんなことを語った。

「仕事をして疲れるのは、自分の力で仕事をするからだ。神様の力、キリストの力で仕事をさせてもらえば疲れない」

と。また、小池先生はいつも告白されている。

「私は、ああ疲れたなどと思ったことは一度もない。夜、深くキリストに祈り入れれば、もの凄い力に満たされる。深く祈って主の御ふところの中に休らい眠れば、朝は力に満ちて目覚めることができる」

と。さらに、

「不如意ふによういな境遇にあればあるほど逆に力が来る。これがクリスチャンの現実です」

と。先生の生活ぶりを拝見していると目をみはるばかりだ。瞬間瞬間を充実して、永遠の時として、その中に完全燃焼しておられる。それはキリストの御力、みたまの力によるのであって、まさに「新たな力」により、「鷺のごとく翼をはりて」飛翔し、また、「走れども疲れず歩めども倦まざる」現実を生きておられる。その秘訣を先生は、

「自分を何者ともしていないから」

「十字架で自我がすっかり片付けられ、自我がすつとばされた無者たる根源視実を、絶対思寵として賜っているから」

「いつもキリストの中へ祈り入っているから」

と告白されている。先生においては、祈りは呼吸であり、みたまのキリストは先生の霊的生命である。聖言・みたまが一如となつて生命を養い、力を与え、化体しているからだ。

私には、このような生きざまが慕わしい。

「わが力は神に在り」



これは私の告白です。「わが力は神に在り」と私が言うとき、それは、

「私は無力である。私には力がない」

ということと同時に言っている。逆境に在るとき、試練に見舞われるとき、私は祈らざるをえない。私は主キリストの中に己れを投げ出す。

「自分は何者でもありません。主よ、貴方の中に帰り往きます。主よ、この身このままお受け取り下さい」

と平れ伏しの心で祈る。私達は、一切の出来事を、全部、キリストとの関わりで受け取っていくのです。苦しみが、また、逆境が、身から出たサビ（わが身の不徳のいたすところ）に由来しようと、あるいはまた、外来の、いわば、いわれなき苦難というべきものであらうと、すべて主様の御手よりこれを受け取っていく。他人がどうこうではない。自分が主と直結しているか、だけが問題だ。そしたら、試練もまた恵みだ。自分を鍛えて下さる愛の御業である。いつも主を讃えよう。主に感謝しよう。感謝と讃美と祈り、これを忘れないこと。

主キリストはわが牧者。私達は羊だ。羊は無力だ。だから牧者の声に聴き従う。羊の我、これが「義」という字。義とは羊の我となつて生きること、羊の相となつて主の御声に順に聴き従うこと。キリスト御自身が父なる神を一切とし、自分は無力に徹しておられた。

「我みずから何事も為し能わず」（ヨハネ5・30）

と。そして、父なる神の聖意に従つて、罪人なる私達羊のために尊い生命を投げ出して下さった。

「善き牧者は羊のために生命を捨つ」（ヨハネ10・11）

と。どん底から我らの罪を荷つて下さったキリスト、この贖罪によつて我らは根底において罪無き者、我執なき者とされた。無者たる根源現実を賜った。根源において、羊の我たる質を賜った。生の現実ではどんなにズレがあつても、心配することはない。くよくよ思い悩むことはない。聖霊が、この根底的無者たる私の中に働いて、私を全き姿に化して下さる。聖霊の力が私を荷い、私を護り、私を全うして下さる。ハレルヤ。

自我の強かった自己義認のサウロ、

「律法の義につきては責むべきところなし」（ピリピ3・6）

と誇ることできたサウロは、ダマスコ途上で復活のキリストに霊撃されて旧き自己に死に、アナニヤの按手によつて聖霊のバプテスマを受けて新生し、使徒パウロとなった。このパウロは、自己の弱さに徹した人、それ故にキリストの無限無量の力に活かされた人だった。

「兄弟よ、我、先に汝らに到りしとき、神の証を伝うるに、言と知慧との優れたるを用いざりき。イエス・キリスト及びその十字架に釘けられ給ひし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり。我、汝らと偕に居りし時に、弱くかつ恐れ、いたくおののけり。わが談話も、宣教も、



知慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らんとためなり」(コリント前書2・15)

「我は、我が蒙りたる黙示の鴻大なるによりて高ぶることのなからんために、肉体に一つの刺を与えらる。即ち、高ぶることなからんために我を撃つサタンの使なり。我これがために三度までこれを去らしめ給わんことを主に求めたるに、言い給う、『わが恩恵なんじに足れり、わが能力は弱きうちに全うせらるればなり』。されば、キリストの能力の我を庇わんとために、むしろ大に喜びて我が弱きを誇らん。この故に我はキリストのために、弱き・恥辱・艱難・迫害・苦難に遭うことを喜ぶ、そは我弱き時に強ければなり」(コリント後書12・5～10)

キリスト道は、逆説道(逆理道)です。キリストに在る弱者は、キリストに在って強者とされるのです。みたまのキリストが我が力となり給うのです。再びイザヤ書から――
「われ地のはてより汝をたずさえ来たり、地のはしより汝を召し、かく汝に言えり。汝はわが僕、われ汝を選みて棄てざりきと。恐るるなかれ、われ汝とともにあり、驚くなかれ、われ汝の神なり。われ汝を強くせん、誠に汝を助けん、誠にわが義しき右の手、汝を支えん」(イザヤ1・9～10)

この「われ汝を強くせん」は、
「われは汝の力となるぞで」

ということとです。無力者の中にこそ主の絶大な力が全うせられる、主がわが力となって下さる。何たる恵みでしょう。何たる感謝でしょう。この聖言を生命がけで受けとつていこう。そして、この力は、他人を倒す力ではない。他人を救い上げてゆく愛の力です。我々は、運命・環境に打ち勝つて行くだけではない。自分がどんな境遇の中にあるときでも、それを乗り越えて、周囲の人達に希望を与え、他人を活かしめてゆくような熾んなる生命、能力を賜っているのです。それは、

「汝ら世にありては患難あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり」(ヨハネ16・33)

の主が、わがかたえにあり、わがうちに居給うからです。

「私がお前の力だよ、大丈夫だ!」

いつも励まして下さるからです。この主の御ふところに深く祈り入りましょう。アーメン。

「信じ入れば みを得

行に転じ 人を助く

主に在り 力あり

主のみ霊こそ 原始力ぞ!」(召団讃美歌A20)



「エン・クリスト」25号

無くてならぬもの（講筵要旨）

1986年1月発行

私は1956年の夏、人生問題の悩みの中で呻吟^{しんぎん}していたとき、大学の友人を通して救主^{すくいぬし}キリストへと導かれた。それから3年後、1959年の晩秋、エマ才会主催の講演会ではじめて小池先生のご講演に接した。「無的実存」という忘れ難い名講演であった。捉^{とら}われなき自由無礙^{むげ}なる豊かな福音の世界。「すべし、すべからず」の律法^{おきて}の世界ではなく、まことの自由を与えているのが福音の世界であることを、先生の天衣無縫^{むほう}、自由活達な語り口とともに、感得することができた。それが自分のものとして身につくまでには、なお長年月の苦闘を要したけれども。

科学と宗教、学問と信仰とは、相対立し相容^いれないものであるのか。どちらかに徹しようとするれば、他方を棄て去らなければならないのか。これは、学問の道に携わる私にとつては、避け難い問題であった。数年後、先生の御著作「宗教と文化」（「曠野の愛」誌37号「小池辰雄著作集第1巻『無者キリスト』所収」）において、この問題に対する解決の指針を与えていただいた。それを私なりに要約すればこうである。宗教と文化との関係は、樹木の姿に現われている。宗教は根つ子の世界で、地中に埋もれていて見えない。取り出して見ようとすれば樹木は枯れてしまう。即ち、対象化し、観察することのできない世界である。しかし、まぎれもなく、もしこの根がなければ樹木は生育しえない。地上に見えている幹、枝、葉と、根とは、伸びゆく方向は正反対である。根はどこまでも地中深く、水脈へと伸びてゆく。また広く地中に拡^{ひろ}がってゆく。樹木はこの根から養分を吸い上げる。宗教は、あたかも、この根の働きた。絶対界に身を投じ入れ、魂^{いのち}（霊）が生命の水を汲み上げる。それは祈りの世界、帰人・祈人の相、人には見えない営み。

「なんじは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉じて、隠れたるに在^{いま}す汝の父に祈れ」（マタイ6・6）

とキリストの言われた通りだ、この隠れた働きがあつてこそ、地上に現じている樹木の繁りゆく相が展開する。幹は道德であり、枝は教育、政治、経済、各種の事業などの営み、葉は学問、花は芸術の営みだ。根がしっかりといてないとこれらの営みは健全に展開しない。学問に志すなら根の世界を大切にせよ。学問と宗教とは、一見矛盾しているように見えても実はそうではない。営みの方向が異なり、次元を異にするにすぎないのだ。神がまことの神であり、真理の源泉であるならば、学問的真理と宗教的真理とは相排斥^{はいせき}し合うものではない。学問をするには、まず、自己自身の捉^{とら}われから解き放たれ、柔軟心、不動心、



そして曇りなき澄んだ眼でものを観ることが大切だ。根の世界を深めてゆけば、天来の靈知^{たまわ}を賜る。恐れずに進みゆけ、との励しと示唆^{しき}をいただいた。

さて、今日の演題「無くてならぬもの」は、ルカ伝10章38～42節に由来する。

「イエス或る村に入り給えば、マルタと名づくる女、おのが家に迎え入る。その姉妹にマリヤという者ありて、イエスの足下に坐し、御言に聴きおりしが、マルタ饗応^{もてなし}のこと多くして心いりみだれ、御許に進みよりて言う『主よ、わが姉妹われを一人のこして働かするを、何とも思い給わぬか、彼に命じて我を助けしめ給え』。主、答えて言い給う『マルタよ、マルタよ、汝さまさまの事により、思い煩^{こころづかい}いて心労す。されど無くてならぬものは多からず、唯一つのみ、マリヤは善きかたを選びたり。此は彼より奪うべからざるものなり』

「饗応^{もてなし}のこと多くして」懸命に立ち働くマルタ。そして「心いりみだれ」て、つぶやきと嫉妬の思いにとらわれた。「私ばかりが苦勞して、マリヤは身勝手すぎるじゃないか」と。これは、しばしば見られる我々の姿でもある。イエスをもてなすことが大切な貴い仕事ならば、分裂なくそれに専念するがよい。自分のベストを尽くし、それを主への献げものとするばよい。見栄えがするか否か、量的に十分かどうかは問題ではない。どんな小さな営みも、神に献げる心根でなされる時、それは神の喜び給うところである。自分と神様との関係における営みであつて、他人を問題とすることはないのである。

マリヤは、全身的な投入の姿でイエスの言に聴き入っていた。マリヤにとつては、根つこの世界への打ち込みのひとときだった。この時機を逃してはもう二度とイエスの話を聴く機会を得られまいとの直観により、一刻を値千金として全身で聴いた。イエスの口から発する靈言はマリヤの生命であつた。「無くてならぬもの」だった。彼女はイエスという靈泉から生命の真清水をいただいていたのだ。

それにつけて思い出されるのはヨハネ伝4章の、イエスとサマリヤの女との出会いの場面である（本誌創刊号「生命の泉」参照）。熱砂の旅路に渴きと疲れをおぼえられたイエスは、サマリヤの女に井戸からの水を求めながら、彼女に「永遠^{とこしえ}の生命の水」を与えんとして語りかけ給ううちに、自らの渇きも忘れてしまわれた。弟子達が食物を買って持ち来たつたときには、食物のことも忘れておられたようだ。

「我には汝らの知らぬ我が食物あり。われを遣^{つかわ}し給える者の御意^{みこころ}を行い、その御業^{みわざ}をなし遂^とぐるは、これわが食物なり」（ヨハネ4・32～34）

と。イエスはきつと、マルタもしばし働きの手を休め、イエスの生命の御言に聴き入ることを望まれたのではないか。マルタはあまりにも張り切りすぎて人間的完全性をもってイエスをもてなそうとしたのではないだろうか。客人であるイエスは、実は、私達を客人として饗応しようとして下さっているのではないか。

「われは生命^{いのち}のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信ずる者はいつまでも



渴くことなからん」（ヨハネ6・35）

「活かすものは霊なり、肉は益する所なし、わが汝らに語りし言は、霊なり、
生命なり」（ヨハネ6・63）

「我を食い我を飲め」とヨハネ伝6章にはたたみかけるように語っておられる。

先ほど、根の世界が大切だと言ったが、キリストの霊の生命を賜わり、まことの霊水を飲み、
霊の糧をもつて養われた者は、必ず、地上にてほんとうの活動をせざるを得ない。価なく
して無条件の恩寵として賜りたる霊の生命（永遠の生命）なるが故に、この恩寵に応えるべ
く働かざるを得ない。どんなにささやかな貧しい営みにも、そこに神の栄光の顕われんこ
とを悲願として。キリストの十字架の贖罪によって、神との縦の関係を真っ直ぐにしてい
ただいた（即ち、義を賜った）われわれは、十字架に極まった神の大愛を体受せし者として、
神の愛の身証者として、隣人に向かって「愛」の流出しゆく泉とせられんことを願う。我々
の地上での営みは、終末の光に照らされてはじめてその真の意義づけを得る。イエスの福
音は、終末の迫りの中で、即ち、審判を経て到来する神の国（新天新地）の迫りの中から語
り出された（ペテロ後書3・8～13参照）。それ故、神の国の成就するとき光り輝くような生
き方をしようではないか。そうすれば、どんな小さな、見栄えなき営みも主の喜び給うと
ころであるに違いない。アーメン。



「エン・クリスト」第26号 創世記（第1回） 光と闇

1986年4月発行

京都キリスト召団では、今年から新しく創世記（旧約聖書）を学びはじめた。天地創造からイスラエルの父祖アブラハムに至るまでの物語は、神話的伝承に基づくものではあるが、そこには神話を超えた深い真理が啓示^{けいじ}されている。これらの記事は、自然科学的ないしは歴史的事実の記述として読むのではなく、神話的表现の中に隠された、人間と世界の現実（リアルティ）をこそそこに読みとるべきである。以下に記す^{しる}ところは所感の一端にすぎないが、読者諸兄弟とともに創世記の中に読み入り祈り入りたく思う。

はじめに神が天と地とを創造されたとき、

「地は形なく、むなしく、やみが淵^{ふち}のおもてにあり、神の霊が水のおもてをお

おつていた」（創1・2～3）

「形なく、むなしく」という全くの混沌、暗闇、空しき状態。しかし神の霊がそれを包みおおつていた。そこに希望のきざしがある。深い闇夜の後に曙光^{しやうこう}がさしはじめるような予感がある。

「神『光あれ』と言いたまなければ光ありき」（創1・3）

神の創造の御業^{みわざ}において、光の創造が最初であつたとは、何たる大きな恵みであろう。

さて、神が万物を創造されたとき、最後に創造されたのが人であつた。曰^{いわ}く、

「神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と

女とに創造された」（創1・27）

「神のかたち」とは外形ではない。内実のことである。神の本質（愛）を人はその本質とすべく造られているのである。愛のない人は人ではない。ところで、第2章4節からの記述（これは別の伝承による）では、人の創造は次のように記されている。

「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。そこで

人は生きた者となつた」（創2・7）

神の生命の息を吹き込まれることによって人は生ける存在となる。息は霊である。神霊の止まる「霊止^{ひと}」こそがほんとうの人だという。そして

「神の口から出る一つ一つの言^{ことば}で生きるものである」（マタイ4・4）

神が人（アダム）に対して与えられた最初の命令は何か。曰^{いわ}く

「エホバ神、その人に命じて言いたまひけるは、園^{すべて}の各種^きの樹^みの果は、汝^{こころ}のままだに食^{くら}うことを得。されど善悪を知るの樹は、汝その果を食うべから



ず。汝これを食べう日には必ず死ぬべければなり」

であった。もし蛇の誘惑^{あそびつき}がなかったならば、アダムは神の戒めを破ることはなかったであろう。しかしまず妻のエバ——彼女はアダムの肋骨の一つから創^{つく}られたアダムの分身であり、アダムにとってまさに

「これこそついに、わが骨の骨、わが肉の肉」

と歓びの声を発せしめた美しく香^{かぐわ}しき女性である——が蛇の惑^{まど}わしにひつかかってしまった。そしてアダムもまた。これが人類のつまずきの第一歩であった。そして光の中にあつた生に死の影がさし込んだのである。

誘惑の手口は巧妙だった。神の言に疑いの念をいだかしめたのだ。夫アダムから聞き、神の言として単純に信じていたエバに対して蛇は言った。

「園にあるどの樹からも取って食べるなどほんとうに神が言われたのですか」

と。「どの樹からも取って食べるな」などと、神は言われなかった。だからエバは直ちに、いやそうではない、ただ園の中央の樹の果だけは、

「これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないから、と神は言われました」

と答えた。「中央の樹」に話題をもち込むことに成功した蛇は、すかさず逆襲に転じた。

「あなたがたは決して死ぬことはないでしょう。それを食べると、あなたがたの目が開け、神のように善悪を知る者となることを神は知っておられるのです」

蛇は「あなた方は決して死ぬことはない」という自己の主張を正当化するために、それに附加して、もつともらしい理由を述べ、エバの心に神の言に対する（ということは神御身に対する）疑いの念をよび起こそうとしたのである。エバの心は動揺した。改めてその樹を眺めてみれば、

「食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましい」

と言われたので、自ら取って食べ、また夫にも与えたので、彼も食べた。すると

「二人の目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、いちじくの葉をつづり合わせて、腰に巻いた」（創3・7）

神の命令にそむいた結果が実に示唆^{しき}深い。アダムとエバとは直ちには死ななかった。それどころか蛇の言った通り二人の目が開けた。蛇の言はほんとうだったのか。蛇の方が正しかったのか。表面的にはそうだった。なるほど、肉体の生命はすぐには死ななかった。しかし最も大切な霊の生命は枯^こ渴^{かつ}しはじめた。二人は罪を犯して、自分のみじめさに気がついた。園の中に主なる神の歩まれる音を聞いたとき、二人は

「主なる神の顔を避けて、園の樹の間に身を隠した」（創3・8）

自ら神との交わりを断ってしまったのである。



人類の歴史に目を転じてみるとどうか。人類のいわゆる進歩は、神からの独立、自我のめざめの中から生み出されてきたといつてよいであろう。

「その目が開けて神のように」

賢くなったのである。科学は進み、技術は発達した。我々はその豊かな恩恵に浴してきた。しかしながら、科学の進歩がその極致に達したいま、人類はその生み出した果（核兵器）によって存亡の危機に直面しているのである。人間の心の面も輝きを失ってははいないか。わが国の現実も、

「不法の増すによりて、多くの人の愛ひややかにならん」（マタイ24・12）

とのキリストの預言どおりの破れた姿ではないか。それが究極的・根源的な「そむき」のゆえであることに気づいてはいない。霊の眼、神様に関わることがらを見る眼は、なお閉ざされたままではないか。

蛇の言は、全部が間違いというわけではなかった。しかし、部分的真実性を全体的真理であるかのごとくに錯覚させるところにサタンの陥穽（おとしあな）が隠されているのだ。科学もイデオロギーもそれ自身の真実性をもつ。しかし、それが「全て」である、それで一切が解決される、と主張するとき、そこに思いあがりか潜んでいないか。科学やイデオロギーを否定するのではない。それに携わり、それを主張する主体たる人間に、神の御前における、平れ伏しの、砕けたる心をもってもらいたいのである。超科学、超合理、超イデオロギーの次元に突き抜け、神の眼を賜り、神の光で事物を見る。それが願いであり呻きである。神の光は愛の光であり、万物を照らし活かしめる命の光である。

今の世は、まことに誘惑多く躓き物の多い現実である。神への信愛の失せたるところには、人への信愛もまた失われてゆく。その中であつて、

「^{おわり}終まで耐え忍ぶ者は救わるべし」（マタイ24・13）

と主は約束された。そして、

「^{みくに}御国のこの福音は、もろもろの^{くにびと}国人に証しをなさんため全世界に宣べ伝えられん、^{しか}而してのち^{おわり}終は至るべし」（マタイ24・14）

と。蛇の誘惑に打ち勝つ道は、主イエス御自身が「荒野の試み」の中で貫かれた神への信従の道、即ち、神の言に全托して従う道である。活ける主、霊なる主キリストを一心に視つめて目を外さないことだ。

「われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし」

との霊光なるキリストの中に祈入する道である。



「エン・クリスト」第27号 創世記（第2回） カインとアベル

1986年8月発行

今回は第4章からカインとアベルの物語をとりあげよう。

「人（アダム）はその妻エバを知った。彼女はみごもり、カインを産んで言った、『わたしは主によって、ひとりの人を得た』。彼女はまた、その弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった」

神にそむき、エデンの園から追われたアダム、エバの夫妻ではあったが、カインが生まれたとき、これを神の祝福として心から喜び感謝した。次いでアベルも生まれた。二人の子宝に恵まれたアダムの家庭は希望と喜びに溢れていたことであろう。長じて兄は農耕に携わり、弟は羊飼となった。いずれも太陽の恵み、自然の恩恵によって成り立つ生業である。その背後に神の護りがある。ある日、二人はそれぞれ、神に献げ物をした。

「カインは地の産物を持つてきて、主に供え物とした。アルベもまた、その群れの初生^{ういじ}と肥えたものを持つてきた」

ところが、なぜか、

「主はアベルとその供え物とを顧^{かえり}みられた」

が、

「カインとその供え物とは顧みられなかった」

聖書（とくに旧約）には、つまずきの箇所がいくつもある。このカインとアベルの献げ物に関するところもその一つといえよう。カインもまた心からお供えをしたであろうに、どうしてカインとその供え物を神は無視されたのか。理由^{わけ}は何も書かれていない。ただ、僅^{わず}かな手掛りは、カインの供え物の方は「地の産物」とだけ記されているのに対して、アベルのそれは「その群れのういごと肥えたもの」と書いてあることだ。ソロモンの箴言^{しんげん}（旧約）に

「あなたの財産と、すべての産物の初なりをもつて主をあがめよ。そうすれば、
あなたの倉は満ちて余り、あなたの酒ぶねは新しい酒であふれる」（箴言
3・9～10）

とある。農産物であろうと、牧畜による産物であろうと、すべての産出物^{たまもの}は神の賜物であり、恵みであるから、その初なり、つまり一番良いものをお供えとして神様に献げる、この心根が大切なのである。自分の収入（収穫物）は「我が甲斐性^{かいしやう}」といった思上がった気持ちではなく、これは大自然と神様とからの恩恵の賜物なのだという謙虚さと感謝からする真心



からの献げ物でないと神は悦び給わない。福音書によれば、キリストは或る日、宮の賽銭箱のほとりで、人々がお賽銭を投げ入れるさまをじつと見ておられたが、ある貧しいやもめがレプタ二つを入れたのを見て、こう言われた、

「よく聞きなさい。あの貧しいやもめは賽銭箱に投げ入れている人たちの中で、誰よりも沢山入れたのだ。みんなの者はあり余る中から投げ入れたが、あの婦人は、その乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである」（マルコ12・41～44）

と。要は、己が真心を、否、己れ自身を、全存在的に献げる心根が大切なのだ。カインには、この点で欠けるところがあつたのではなからうか。

さて、神に顧みていただけなかつたカインは、大いに憤^{いざお}つて顔を伏せた。そこで主はカインに言われた。

「なぜあなたは憤るのか、なぜ顔を伏せるのか。正しいことをしているのなら、顔をあげるがよい。もし正しい事をしていないのなら、罪が門口^{かどぐち}に待ち伏せている。それはあなたを慕い求めるが、あなたはそれを治めなければならぬ」

と。我々は、義なる神の前に出るとき、もし心の中を透視されるなら、己が心のやましきゆえに、とても顔をあげることができない。審^{さば}かれて当然の自分だと思う。神の前に自分は絶対に義^{ただ}しいと言い切れる人はいないのである。もし、カインがただ一人で神の御前に出て、神に叱責されたのならば、カインもまた冷静に自らを省み、自己の非を悟り得たことであろう。しかし、アベルと共にそれぞれ献げ物をしたのに、弟のアベルとその供え物は嘉納^{よみ}されながら、兄たる自分とその供え物は拒否されたのだ。なぜこんなことが！なぜ弟は受け入れられて、自分は受け入れてもらえないのか。弟は義^{ただ}しくて自分は義しくな^いというのか。カインの心に妬みと怒りの思いが充満し、冷静さを失つて神のさとしをも素直に受け入れることができなかった。ああ、これが人間世界の現実なのである。人は、すぐに他人と比較してしまうのである。あの人はあんなに秀れ、恵まれ、幸せなのに、同じく人間に生れながら自分はなぜこんなに不幸なのか、なぜこんなにみすばらしいのか、なぜ自分ばかりが責められ、苦しまなければならないのか、と。そればかりではない。実に親自身がすぐ子供を比較する。

「上の子はおとなしく、よくできたいい子なのに、下の子は乱暴で聞きわけがなく、どうも」

とか、また、先生が生徒を評して、

「○○君はいいが、××君はどうもねえ」

とか。これが子供や生徒の心を傷つけるのである。我々は、他人との比較から絶して、神様「キリスト」と自分との「二対一」の関係へと帰りたい。実に、一人ひとりが神によつてかけがえなく尊い人格として創造され、在らしめられているのだ。そのことに気づこうで



はないか。神の慈愛の眼は一人ひとりにのびきならない仕方では絶対的に注がれているのだ。神は、我々が誤りを犯したときにはこれを正し、常に義と愛をもつて導き給う。義（審き）の奥に愛が隠されているのだ。

神の仕打ちに対して憤ったカインは、確かに「正しい事をして」いなかった。神への信頼の絆を見失いかけていた。神への信頼の失せるとき、即ち、心が神から離れるとき、恐ろしいことが待ち構えている。人の魂を狙い、人を罪へとひきずり込もうとする力（サタンの誘惑）が待ち伏せているのである。

「罪が門口に待ち伏せており、あなたを慕い求めている」

とは何と不気味なことだろう。人は自暴自棄になったり、無気力に陥ったりしたとき、この「罪の力」に足を掬われるのである。だからキリストは「主の祈り」の中で、

「我らを試惑に遭わせず、悪〔の力〕より救い出し給え」（マタイ6・13）

と祈るようにさとされた。否、天界のキリスト御自身が、今、あなたのためにこのように執り成しの祈りをして下さっている。

気の治まらないカインはアベルを野原へ誘い出した。そして野でアベルに襲いかかり、彼を殺してしまった。主はカインに言われた、

「弟アベルはどこにいるのか」

カインは答えた、

「知りません。私が弟の番人でしょうか」

そこで主は言われた、

「あなたは何ということをしたのか。あなたの弟の血の声が土の中からわたしに叫んでいる。今あなたは呪われてこの土地を離れなければならない。この

土地が口をあけて、あなたの手から弟の血を受けたのだから」

神から罪を示され、この土地からの追放を宣告されたカインは、我にかえり、自らの罪の重さに愕然とした。怒りに満ちたカインはもうそこにはなかった。悔いの思いで悄然たるカインは主に言った。

「わたしの罪は重くて負いきれません。あなたは今日わたしを地の面から追放されました。わたしはあなたを離れて、地上の放浪者とならねばなりません。

わたしを見付ける人は誰でもわたしを殺すでしょう」

と。これに対して主はカインに言われた、

「いや、そうではない。誰でもカインを殺す者は七倍の復讐を受ける」

と。そして主は、カインを見付ける者が誰も彼を打ち殺すことのないように、彼に一つの印をつけられた。カインは主の前を去り、エデンの東、ノドの地に住んだ。

悔い改めのカインをかばい給うこの主の言葉は、私に大きな感動を与える。ここに神の深き憐みを見る。放浪の旅に出るカインを主は慈しみの眼差しをもつてみつめ、力ある御手



の中に護り給う。このところにきて、私の心は、重苦しい張りつめた状態から解き放たれ、救い上げられたような思いに包まれるのである。

義人アベル！ 彼は犠牲となつて若き生命をおとした。しかし彼は兄のために執り成しているに違いない。

「父よ、彼を許し給え、その為^なすところを知らざればなり」

と。この地上は、義人、罪なき魂（幼児）の犠牲の死によつて保たれているように思う。その人達は、烈^{はげ}しき義を叫びつつ、逆にどん底から迫害者や不義なる罪人の罪過を荷い、許しを神に祈っているように思われる。代々の預言者、殉教者たちの祈り。何よりも我らの主キリストは、我らすべての者の罪を一身に引き受けて十字架におつきになった。この犠牲の血、尊き許しの大愛をさえ拒み、無視しつづけるならば、その結末はその人自らが刈りとらねばならない。

カインとアベル！ 我らはアベルたらんと欲するも、内にはカイン的要素が潜^{ひそ}んでいる。不従順、不信、嫉妬^{ねたみ}、ひがみ、怒り、争い、等々。使徒パウロの歎^{なげ}き、即ち、

「善を欲することあれど、これをなさず、反^{かえ}つて欲せぬ所の悪をなす。我もし

欲せぬ所の事をなさば、これを行うは我にあらず、我が中に宿る罪なり。：

…噫^{ああ}、我れ悩める人なるかな、この死の体^{からだ}より我を救わん者は誰ぞ！」

との叫びは、他人事ではない。生来の我は自己中心であり、神を喜ばせることができない。この我執の我（生来の我）が主とともに十字架されてある絶対恩寵の根源現実を、祈りの中で深く受けとり、キリストの御霊の生命の中に新生してこそ、アベルの相で生きることが可能となるのである。

